

ガリラヤでお目にかかれる マルコ16:1-8

聖書には不思議なエピソードがたくさん登場します。その一つに次のようなものがあります。

マグダラのマリア、イエスの母マリア、そしてサロメの3人が、イエスの遺体に油を塗り、布でまくために墓を訪ねた時のことです。驚いたことに、墓をふさぐ大きな石が既にどけられており、墓の中に白い衣を着た青年がいます。彼は3人に語りかけます。「あの方はここにはおられない。あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」

このエピソードの表面だけを見れば、荒唐無稽な話、あり得ない話で終わってしまいます。しかしそこにはそれでは済まない深い意味が込められているのです。

その意味は、「あの方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」という言葉にでてくる、ガリラヤに注目することによって明らかになります。

ここでいうガリラヤとは、イエスが群衆に向かって教えを説き、病人を癒し、貧しい者を力づけ、社会から疎まれていた人々とパンを分かち合った、あのガリラヤ地方のことです。

ここでイエスが宣教の旅を始めたガリラヤ地方の人々の日常生活や信仰を簡単に振り返ってみましょう。

彼らは生活が楽だったり、自分の思い通りに事が運ぶと、神様に感謝しましたが、いったん苦労や困難に出会うと、「神様はどこにおられるのか?」と思ったり、「神様は私のことなどかえりみてくださらないのではないかと不満を述べるのが常でした。

ここで私たちは一つの重要な点に気づきます。ガリラヤの人々と私たちはそっくりだということです。つまり、ガリラヤとは私たちのことなのです。

白い衣を着た若者が言った、「あの方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる」という言葉の意味は、イエスは私たちの現実の中で私たちと連帯しておられるということなのです。

話を2000年前のガリラヤの人々に戻しましょう。イエスは、彼らに肉眼で見ることができないものがある。それは、神の導きの御手だ。信仰の眼(まなこ)で見るとのみ、良い時も悪い時も、喜びの時も悲しみの時も、常に導き、育み給う神の愛をしっかりと見極めることができる。そうイエスはガリラヤの人々に語って飽きることはありませんでした

そしてそのメッセージを、病人を癒したり、足の立たない人を歩けるようにしたり、貧しい人々を力づけたりする行為で明らかにしたのです。

イエスが優しさの眼差しを向けた病人や精神を病んでいる人や、身体に障害のある人や、貧困者たちは、神の呪いの下にいると見られて、村の外で、家族にも捨てられてひっそりと生きていたのです。

ここで重要なのは、イエスは、この神の呪いという考えを徹底的に否定されたという事実です。

病人や足の立たない人や精神を病んでいる人や、貧しい人々は決して神に呪われているのではないのです。その反対に、神は彼らすべてを慈しみの手でかき抱き、絶対見離されることはない。そうイエスは主張して飽きることはなかったのです。

彼らは神に呪われているという間違った考えから解放されて、自分は神によって徹底的に愛されており、それ故に生きる価値のある、誰も自分の代りを務めることのできない、宇宙で唯一の、かけがいのない、一個の人格的存在だという真実に目覚めたのです。病が癒され、なえた足が立つようになり、悪霊から解放されたという不思議な出来事の奥に潜んでいる深い意味が、ここにあります。

つまり、ガリラヤでのイエスの活動の焦点は、人間の解放であり、人間の尊厳の回復にありました。信仰の眼(まなこ)で見ると知った人間の勇気と喜びの物語がそこに展開しているのです。

ここに私たちへの大切なメッセージがあります。私たちには信仰の眼(まなこ)が与えられているのです。いかなることがあろうと、地獄の底にいようと、神の導きの御手をしっかりと見極めることのできる眼(まなこ)が与えられているのです。

ここでガリラヤという言葉の意味が一層明らかになります。ガリラヤとは、私たちの日常の現実なのです。日常生活そのものなのです。「あの方とガリラヤでお目にかかれる」というのは、私たちが毎日の生活を精一杯生きるその直中に、主イエスは来たり給う。だからこそ私たちは厳しい現実と真正面から向き合い、正々堂々と生きることができるといメッセージなのです。

その信仰の眼に磨きをかけようではありませんか。曇りを取り払おうではありませんか。いかなる絶望も孤独も、死さえも、私たちを神の愛から引き離すことはできないという真実を仰ぎ見て生きようではありませんか。

神の導きの御手は、いかなる時も消え失せることはないのです。私たちは、イエスと私たちのガリラヤで、お目にかかれるのです。

これ程の慰め、これ程の恵みがあるでしょうか。